



自 転車通勤を始めて半年が過ぎた。これから正念場の夏を迎えようとしている。太ももにうつつらと肉もついて、体も自転車仕様になってきている。動かせば、いくつになってもそれなりに適応しようとするのが体というものらしい。初め頃より重いギアで同じ坂道を上っていることにふと気づく。

自動車に乗っていると、濃淡はあれ事故を起こすのではないかという不安が常につきまとう。こんなに硬くて重たいものと生身の人間が同じところを通るなんて狂気の沙汰だ、と未来の人間たちはぼくたちにあきれてるんじゃないか、そんな空想が時々よぎる。

自転車だから安全とも限らないが、少なくとも甚大な加害に及ぶ確率はうんと下がる。十キロばかりの機械なら個人が日常で扱える範囲内という気がするが、一トンもの道具はそもそも過剰なのだ。そうはいってもぼくの中で自動車や車社会を肯定する部分も少なからずあるわけで、天気予報で出退勤時に傘マークを見つけたら車を選ぶ。甚だ徹底を欠いている。

自分の通勤スタイルについて何一つ言った覚えはないし、ぼくに触発されたわけでもないだろうが、冬を越したあたりからぼつりぼつりと自転車通勤を試みるものが出始め、がら空きだった職場の自転車小屋に色とりどりの自転車が並ぶようになった。

「今日は立ちこぎせずにここまで来ました。」とママチャリで通勤を始めた中堅職員が、額の汗を拭いながらにこやかに言う。職場は丘の上にあるので、どこからこようと結構な勾配を上つてたどり着かねばならないのだ。それが自転車を敬遠する理由だという者もあるが、こんなふうに乗しなう者もいる。体重に頼るのでなく脚力で上りきるのが目標になっていたのだという。

「なんだか楽しいです。」
二十台の女性教師は、そう言つて、キャップを目深にかぶつて颯爽とスポーツバイクにまたがる。坂道を一気に下つていく背中を見送りながら、となりの教師が、「少年だなあ、まるで。」と笑う。背が高く体も引き締まっているから宝塚の男役みたいでかっこいい。

いつもぼくが駐めているところの隣に黄色の見慣れぬクロスバイクがあるのに気づいた。ひよつとしてと思ひ、四十代の女性教師に尋ねると、「今日だけです。」とはにかんだように笑つた。風に吹かれるままの行き帰りを経た者同士に見せる顔。これも楽しい贈り物だ。

次の朝、やっぱり黄色いバイクがそこにあつた。今日だけのはずが思ひのほか楽しかつたらしい。



専業ババ奮闘記(その2) 6

木幡智恵美

小旅行(1)

十 年に一度くらい、体調がすこぶる良くない年が巡ってくる。三月の終わりに頃に咳と痰が出だし、いつまで経っても治らない。家族中がインフルエンザに罹つた中、私だけ罹らずに済んだというのに。義母の入院、その後の介護と、疲れが出たのだろうか。

かかりつけ医に行つて薬をもらい、服薬している間は症状が治まるが、薬が切れるとまた元の状態。ぐずぐずしていた最中、神戸にいる長男がゴールデンウィークに入る前に帰つてきた。長男の帰省に合わせて義母の百歳のお祝いをする事になっていたので、娘一家を呼び、我が家でささやかなお祝いをする。白寿の祝いの際には、最後まで硬い表情でお父ちゃんの膝から離れなかつた実歩も、一年経つたせいも、場所が馴染みの家だつたためか、すぐに表情が和らいできた。寛大は最初からご機嫌で、長男にえらく懐いている。娘が出産の度に世話になる産院の看護師さんが、ある時寛大の後ろ姿を見ながら、「あら、義一君だがね」と言う。その看護師さんの娘さんが長男と同年年で、息子のことをよく知つていたのだ。おつとりした佇まいが似ているのだろうか。実際長男と寛大は波長が合うようだ。

義母の百歳のお祝いが無事終わり、翌日は長男の所望で足立美術館に行く。庭に感動した息子は、写メを撮りまくつていた。

翌朝、息子を送り出した後、娘が寛大と実歩を連れてきた。近くの公園で遊ばせていると、寛大が咳をする。「寛ちゃん、風邪?」と聞くと、「ずつとだに。私もだし」と娘。「もうすぐ茨城に行くんだから、それまでに治さんとね」そうだ。娘たち母子との小旅行が一週間後に迫つていた。

翌日からは、なるべく安静にと、散歩もせず、家の中で体を休めた。実際、咳も痰も治まらず、体がだるい上、腹痛まである。動く気力さえ無くなつていた。

30代フリーター やあ、ジイさん。新型コロナウイルスに対する各国・地域の指導者の対応をどう評価するかをそれぞれの国民・住民に尋ねた国際比較調査で日本は最下位だったと報じられている（5月8日時事ドットコムニュース）。

年金生活者 新型コロナによる人口当たりの死者数を国・地域別に見ると、日本は下位に位置している。それなのに、安倍政権への評価が低いのは、政権が得意としてきた「経済優先」と「政治主導」をコロナによって封じられているからだろう。

緊急事態宣言は「経済優先」とは正反対の政策であり、これまで底堅い内閣支持率を支えてきたアベノミクスの成果を帳消しにするほどの打撃を日本経済に与えた。その傷を手当するため国民への給付金は所得制限付きの30万円が悪評で、あわてて一律10万円に変更したものの、アベノマスク同様にいつ国民に行き渡るかわからない状態にある。

よりも医療システムを守ることにあ
る。医療崩壊したら大変なことにな
ると、新たな恐怖心呼び起こし、自
粛の徹底を迫る。

部分的な「正解」を全体的な「正
解」として扱った結果であり、そう
した逆立ちを具体化したのが「新しい
生活様式」だ。食事のときは横並びに座
り、大皿を避け、なるべくしゃべら
ず、食べることに集中する……。

そこには権力としての医療が政府を
左右している姿がある。それは「医療
崩壊」の前に「経済崩壊」を招く恐れ
がある。

医療崩壊を防ぐ王道は患者の受け入
れを制限することではなく、受け入れ
る能力を高めることだ。それをサボっ
てきたツケがいま回ってきているのだ
としたら、応急処置によって受け入れ
能力の拡張をはかるほかない。任務を
次々こなすのに精いっぱい医療従事
者たちにはできないことであり、政
権がルールや前例を破って実行するほ
かない。それにもたついたことに国民

30代 やることなすこと、なんであんなに遅いんだ。

年金 わずか10万円の現金をさつさと配ることもできないのは、行政組織がそれに対応できないからだ。言い換えれば「政治主導」によって今まで動かしてきた官僚を今度ばかりは思うように動かせなくなつたことを意味する。その理由をひとりでいえば、動かさなければならぬ相手が今までに比べて格段に多いということだ。

「官僚主導」から「政治主導」への転換は安倍政権が民主党政権から受け継いだ基本政策のひとつだ。内閣人事局を新設し、霞が関の幹部人事を官邸が一手に握る体制をつくりあげた。それが官僚による政権への過剰な忖度をはびこらせる副作用を生んだ。「政治主導」がそれだけ力を発揮したこと証左ともいえる。

だが、その力が及んでいたのは主として高級官僚、つまり人事で脅せる相手にとどまり、物事を実行できる範囲に限られていたと想像される。国民ひ

の批判が集まっている。

30代 東京保険医協会の調査では、都内の診療所を受診する患者が大幅に減っていると報じられている。「外出自粛や、医療機関での感染を恐れて受診を控えたことなどが影響している」そうだ（4月24日朝日新聞デジタル）。

年金 患者が自分で受診を「不要不急」と判断したと推察され、診療所に

とりひとりへの例外的なカネやモノの配布は、官僚組織の頂点から末端まで大勢を動員して新しい体制をつくらな
いとできないはずだ。官邸の「政治主
導」ではそれが難しいことをコロナ危
機はあらわにした。

安倍晋三がコロナ対応で左派・進歩
派からだけでなく、右派・保守派から
も批判されているのは、「経済優先」
「政治主導」というふたつの武器の使
用を封じられた現在の状況を乗り超え
られないでいることへの不満、いらだ
ちからと推察される。

30代 専門家会議の「新しい生活様
式」の提言には恐れ入った。

年金 正解が正解にとどまらず、信仰
となり、人びとを動かす。医療崩壊を
させてはいけないという「正解」が今
それに近い状態になっている。

外出や営業の自粛の要請に人びとが
従うのは未知のウイルスが怖いから
だ。政府はその恐怖心に助けられて強
制なしに国民の行動に制限をかける。
その最大のねらいは個人を助けること

行かなくて済んでほつとした患者だっ
ているに違いない。

新型コロナは医療が時として国家を
動かすほどの権力を持つていることを
明るみに出した。「医療は、これまで
誰も持ち得なかつた『国民の人権さえ
も制限できる巨大な力』を持つてし
まった」と医師自身に言わしめた（森
田洋之「人は家畜になつても生き残る
道を選ぶのか?」、4月14日南日本へ
ルシリサーチラボ）。

同時に医療はその「巨大な力」を発
揮したことで受診の「自粛」も広げ、
医療行為のかんりの部分が「不要不
急」であることもあらわにした。患者
がこれまで「不要不急」の受診をして
いたのは、権力としての医療がそれを
「必要緊急」なものとして扱ってきた
からだ。それを正当化しているのが、
患者をひとりも死なせてはいけないと
いうゼロリスク神話にほかならない。
それは自然法則によって決まる人の生
死をあたかも医療が決めるかのような
思い込みを生み出した。

ニュース日記 738
中村 礼治

新型コロナがあらわにしたもの